

財団法人 渋沢栄一記念財団 発行

青淵(せいえん) 第732号
平成22年3月

空間の記憶と手触り

ジャーナリスト

藤原 房子

られるのだろうか。そんなことを全く意識せずに学生時代を過ごした私自身が、よろず荒廃した戦後の時期だったからとはいえ、いかにも朴念仁とされたようで、落ち着かない気分になった。

印刷した年賀状に添えられた手書きの短い言葉は、それぞれ心に残る。今年自身内に大学受験生を持つ同窓の方から、高校生の娘が母校を下見に行つて「建物が汚いから受験をやめると言った」とあったのには「ドキリとした。それは私が「汚い」とされた古い建物の保存と活用を願う運動をしていることを承知で書かれたものだったからである。

古いことは汚いこと、と言いたげな表現に出会うと無条件に抵抗がある。長い歳月を経て周囲の樹々にもよくなじみ、程よく外壁が風化した建物のたたずまい、

落ち着き、貫禄、風情などは、若者にも大人にも評価されないのだろうか。今は歴史的ビルも街並みも、おまじない程度に一部だけを残してあっさり壊され、新しくするのが主流である。

世の風潮がそうだとしても、大学の建物は今風に「美しく」なければいけないのだろうか。学校は教育の中身こそ大事、ホテルや商業ビルや劇場等とは違うのに、私はこだわらる。建築としては確かに美的要素も重視されなくてはなるまい。しかし青春の一時期を過ごす大学の外観が、進学の際の選択基準になるほど強く求め

一九一八年仮校舎で開学した東京女子大学は、その四年後に現在の杉並区の一画で本格的な校舎建設を開始、モダンな白亜の建物九棟が広い敷地に配置され今日に至った。建設費の九割以上はアメリカやカナダなどのキリスト教団体や個人の寄付を受けており、グラントデザインから内装まで、チエコ系アメリカ人アントン・レーモンド氏が創立期の理事の一人A・K・ライシャワー博士の指名を受け、若い日の情熱を注いだ作品である。

大正期の近代建築で、道路から見ると白亜の本館は写真等でおなじみかもしれない。植え込みが美しい前庭芝生の左右には昔のままの校舎、手前右の木陰に高い塔のあるチャペルと講堂を持つ。本館の左奥、横長のキャンパスほぼ中央あた

りに優雅な体育館があり、さらに奥に進むと中央の八角の塔を挟んで白鳥が左右に羽を広げたように、東西二つの二階建て学生寮があった。一〇〇の個室が口の字型に並んでいた。当初の敷地は樹木もまばらなスキの野原だったが、昔の学生が資金を集め長年かけて植樹を続け、誰が名付けたかシェイクスピア・ガーデン、萬葉の杜などを作り上げ、豊かな奥深さを創り出していった。

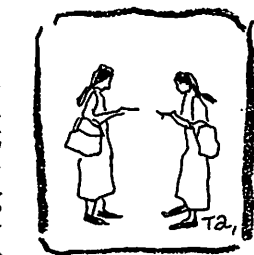
それらが徐々に変貌し始める。既にレームンド氏が戦後のキャンパスを見て、相つぐ増築で空間の失われたことを、自伝に「構内に建物が散らばった」と無念そうに書き記したが、その時は学生数の増加や大学の発展のために、やむを得ないことと皆が受けとめていた。むろん初期の建物を壊すことはまだなかったのである。

ところが近年キャンパスの眺めが大きく変わった。短期大学の創設と拡大で三鷹市に移っていた短大が、学部再編等で杉並区に戻り、三鷹の土地売却による資

金を構内の整備開発が始まる。その一環として最初に建てられた体育館と寮を壊すことになったのである。この計画が同窓生に知らされたのは四年前の同窓会総会であった。初めて知った私はなんとか寮は残せないものかと、意見を同じくする同窓生を誘って大学側にお願した。実をいうと私は昭和三年から五年間、戦後の教育制度の大改革期に在学し、旧制度から新制大学への移行期を含めてずっと寮で暮らし、食糧難の時代に空腹を抱えながら自由な共同生活を楽しんだ。その恩恵を心の宝だと思ひ、こよなく懐かしむ者として「ぜひご再考を」と活用案も添えて申し出たが、簡単に退けられた。

今さら言っても繰り返すに過ぎないが、その寮は女子の高等教育が普及していなかった大正期に、堅牢第一の構造で鋭角的な凹凸のある外壁や内装に、チェコキエビズムの特徴が見られる美しい鉄筋コンクリート、日本の教育史に残る記念すべき建物だった。男子寮でもコンクリート

高さを低く抑え、キャンパス全体の調和が保たれた。バルコニーには外からもフロアを見下ろせる広いガラス窓があり、建物の四隅には談話室などに使える部屋があり、本格的な暖炉が設けられた。構造の専門家によるとこの四隅の二階建て部分が広い空間を安定的に支え、フロアの三方を囲むテラス風回廊とともに地震への万全の備えだった。



ト造りは昭和十年代に入ってからと聞いている。狭いながらも個の確立を尊重する意図を示す個室は、一般の生活水準と比べて破格の贅沢だったが、全国から志高い学生が集うことを期待していた。新渡戸稲造初代学長は一日に一度は一人になって静かに瞑想し、祈る時間が大切という教育理念を実現するため、この方針を守らせたという。

体育館も安井てつ二代学長が強調されたように、今後の女性に必要な要素の一つとして社交性の涵養をあげ、体育の充実を通して育てたいとの展望と願いを込めて「これを体育兼社交館と名付けたい」とまで述べたユニークな建物であった。中央のフロアは地面を掘り下げて建物の

スロープと呼んで講義をさぼった学生が寝そべった癒しの木陰を思い出す人もいるが、ここは衆人環視である。

ともあれ由緒ある建物の保存と活用の提案活動は、意外にも同窓生に理解が得にくかった。シンポジウム等の行事、パソコンを通じての広報、口コミ、チラシ配布、メディアへの働きかけなど手を尽くしたが浸透は難しかった。一万人を超える署名や多数のはがき作戦も大学には単なる迷惑だったらしい。

思えば破壊と再生は、戦後至る所ですつと続き、日本人はすっかり慣れっこになった。戦争期を生きた世代の多くが体験しているように、私も母校の多くを失った。戦争末期の空襲で市部のほとんど

が焼失した私の郷里・福井市では、卒業した幼稚園、小学校、女学校、すべてが焼け落ちた。みな記憶だけで、五感を刺激するものは何一つない。焼け跡のバラック校舎を卒業して東京に進学した時、まともな校舎に学ぶだけで大感激だった

日々を思い出す。私にとって形ある母校は今や大学だけになった。しかし一番の心の拠り所だった学寮が、防災と将来の発展のためとの名目で壊されたショックと落胆は大きい。

体育館も初めて体育の喜びを体験できた場所だった。小学校は富国強兵の名の下にやみくもな鍛錬、女学校は竹槍を持つての教練だったから、大学での体育は心を開放し、すこぶる新鮮だった。あの空間に先生の明るい声が響き、体育嫌いが見事に解消した。だがあろうことか戦後の自由と自立を学んだ原体験の舞台だった建物は二つとも消えた。心の中に記憶を大切に抱いているものの、手触りが残っていない。

今年の年賀状のもう一枚に、昔の同級生で西寮にいた友人からのものがあった。長く関西に住むその人は昨年、久しぶりに大学の近くまで行つたけれど、「寮や体育館の跡地を見るのがつらくて立ち寄りませんでした」と書き添えてきた。そんな思いを抱く人が少なからずいる。